

早稲田大学大学院文学研究科美術史学専攻博士学位請求論文

広隆寺の創立と移転

林
南
壽

広隆寺の創立と移転

緒言

第一章 広隆寺研究の現状 — 創立と移転に関する研究史 —

はじめに

一 創立と移転に関する史料

二 研究の始まり

三 北野麿寺址の発見

四 蜂岡寺・秦寺別寺説の展開

むすび

第二章 広隆寺の寺号 — 問題の所在 —

はじめに

一 蜂岡寺・秦寺同寺説の検討

二 蜂岡寺の寺号

三 秦寺の寺号

四 蜂岡寺と秦寺の関係

むすび

第三章 蜂岡寺の創立と造営

はじめに

一 蜂岡寺の創立

二 蜂岡寺の寺地

三 北野廃寺址の発掘成果

四 蜂岡寺の造営経過

むすび

第四章 秦寺の創立と造営

はじめに

一 秦寺の創立

二 現広隆寺境内地の発掘成果

三 秦寺の造営経過

むすび

第五章 蜂岡寺と秦寺の合併

はじめに

一 移転合併の理由とその時期

二 合併後の試練と道昌による復興

三 蜂岡寺・秦寺同寺説の発生

むすび

第六章 蜂岡寺と秦寺の本尊

はじめに

一 宝冠弥勒と泣き弥勒の像容

二 宝冠弥勒の制作地

三 宝冠弥勒と泣き弥勒の制作年代

四 蜂岡寺と秦寺の本尊

むすび

第七章 広隆寺の本尊

はじめに

一 薬師像と本尊の交替

二 薬師像の移入時期

三 薬師像の本尊化

むすび

結語

概要

広隆寺は蜂岡寺あるいは秦寺、秦公寺とも呼ばれ、京都最古の歴史を有する寺として名高く、奈良の法隆寺や大阪の四天王寺とともに聖徳太子信仰の寺としても有名である。

『日本書紀』推古十一年（六〇三）十一月条には、秦河勝が聖徳太子から仏像を受け、それによって蜂岡寺を造ったと記され、また同三十一年七月条には新羅獻上仏が秦寺に安置されたと記されているが、いずれにも創立年次は明記されていない。また、承和三年（八三六）に成立した『広隆寺縁起』には、広隆寺は葛野郡の九条から現在地に移転したと記

されているが、移転の時期や理由については述べられていない。そのため広隆寺の創立と移転については、美術史だけでなく、仏教史や日本史など様々な分野から研究がなされてきたが、未だ解決されていない問題も多く残されている。

本研究では広隆寺の創立と移転問題を中心に、現在靈宝館に安置されている宝冠弥勒、泣き弥勒と呼ばれる二軀の菩薩半跏像と、平安時代の広隆寺の本尊に関する問題について、七章にわたって考察する。以下その概要を述べる。

第一章 広隆寺の創立と移転に関する文献史料を掲示したうえで、明治から近年に至るまでの先学の研究史を紹介し、これまでの研究成果と問題点を整理する。

まず広隆寺の創立については、一九〇七年の平子鐸嶺による『日本書紀』推古十一年条に対する検討の結果、広隆寺は推古十一年に秦河勝が聖徳太子から仏像を受けたことを契

機として創立されたことが有力となった。また一九一五年に喜田貞吉は『広隆寺縁起』にみえる移転について検討し、旧寺家地として平野神社の近くの地を想定した。その後一九三六年に平野神社付近から京都最古の寺院址である北野廃寺址が発見され、現在ではこの北野廃寺址が広隆寺の旧寺家地と考えられている。さらに広隆寺移転の時期と理由については、一九四四年に田中重久が、平安遷都によって寺家地を収用されたためとする見解を提示し、これがほぼ定説となっている。

その後、北野廃寺址や現広隆寺境内地の発掘調査が進むにつれ、両地にはいずれも飛鳥時代から寺院が存在していたことが明らかになり、広隆寺が太秦の現在地に移転してくる前から現在地に所在した寺院とは如何なるものかという疑問が生じた。そこで従来は広隆寺の別号とみなされてきた蜂岡寺と秦寺を別個の寺院と考え、これらを北野廃寺址や現広

隆寺境内地にあった寺院に当てる見解が提示される一方、従来どおり蜂岡寺と秦寺を同一寺院とする見解もある。したがって、現時点における研究の焦点は、蜂岡寺と秦寺が別寺であったか否かという問題に絞られてきている。

第二章 広隆寺の寺号を検討することによって、蜂岡寺と秦寺との関係を考察する。

明治以来の広隆寺研究は、蜂岡寺と秦寺を広隆寺の別号、すなわち同一寺院とする前提のもとに組み立てられてきた。しかし蜂岡寺と秦寺を同一寺院とする認識が確認できるのは平安時代以降である。蜂岡寺と秦寺には同じ秦氏を檀越とするという共通点はあるものの、奈良時代までの文献史料には、両寺院の接点をみいだすことはできない。さらに両寺号に関するもつとも初期の史料である『日本書紀』には、蜂岡寺と秦寺という別の寺号のもとに、別の内容が記されていることから、蜂岡寺と秦寺が同一寺院であるという従来の

見解は否定せざるを得ない。

蜂岡寺と秦寺が別個の寺院であったとなると、蜂岡寺と秦寺は何時どのようなようにして創立されたのか、また『広隆寺縁起』のいう移転を如何に解釈すべきか、さらには蜂岡寺と秦寺を同一寺院とする認識が何故に生じたのかという問題が新に提起されることになる。このうち最後の問題に関しては、平安初期以降、秦氏の氏寺という意の秦寺という寺号が実際に用いられていたことを確認できるのに対し、蜂岡という地名に因む蜂岡寺の寺号は聖徳太子伝記類や辞典類にみえるのみで、実際に用いられた形跡がないことを留意する必要がある。

第三章 蜂岡寺の創立と寺家地、造営経過を検討する。

蜂岡寺は、『日本書紀』推古十一年十一月条によって、推古十一年に秦河勝が聖徳太子が

ら仏像を受けたことを契機として創立されたことがわかる。しかし、秦河勝が受けた仏像は小金銅仏であつたとみられることから、その当時に本格的な伽藍が造営されたとは考え難く、当初の蜂岡寺は太子から受けた仏像を安置する住宅式仏堂であつたと推定される。

また平安初期に成立した『上宮聖徳太子伝補闕記』によると、蜂岡寺は法隆寺が被災した天智九年（六七〇）ごろに何らかの造営工事をおこなっており、これは住宅式仏堂を本格的な伽藍に整備するための造営であつたと解釈できる。

蜂岡寺の寺家地は、秦河勝の邸宅内もしくはその近くであつたと考えられるが、秦河勝の邸宅は『天曆御記』から平安宮大内裏の位置にあつたことがわかる。したがってこの大内裏に近く、かつ葛野郡において飛鳥時代の瓦を出土する北野麿寺址が蜂岡寺の寺家地であつたと推定される。

北野麿寺址出土の七世紀の瓦は、二期に分類できる。第一期は推古朝前半から後半ごろ、第二期は天武朝ごろに編年され、前者は蜂岡寺創立当初の住宅式仏堂に用いられたもの、後者は本格的伽藍に整備された時期の瓦であると考えられる。また八世紀の瓦は、興福寺式瓦や平城京式瓦が多数出土しており、当時の蜂岡寺が中央と密接な関係にあったことを示唆している。

第四章 秦寺の創立と寺家地、造営経過について検討する。

まず創立年代については『広隆寺縁起』の記事をもとに検討する。『広隆寺縁起』には推古三十年に聖徳太子のために「広隆寺」を建立したと書かれている。この「広隆寺」は蜂岡寺と秦寺のいずれであるかが問題となるが、蜂岡寺は第三章で検討したとおり推古十一年に創立され、天智朝末ごろに本格的伽藍に整備されているから、「広隆寺」は秦寺のこと

と解釈される。推古三十年二月には聖徳太子が薨去しているから、秦寺は太子の追善のために発願造営されたと考えられる。

また『日本書紀』推古三十一年七月条には新羅使者が仏像を献上し、その仏像を秦寺に安置したとあるが、この出来事は実際は推古三十年七月のことである。秦寺は聖徳太子追善のために同年二月ごろに発願されたのであるから、新羅使者が来日した当時は伽藍建立のための準備段階で、本尊も未定であったために、その本尊として新羅献上仏が納められたと推定される。

秦寺の寺家地は、葛野郡において北野麿寺址に次ぐ古い瓦を出土する現広隆寺境内地であると考えられる。現広隆寺境内地出土の七世紀瓦は二期に分類され、第一期は推古朝末期から舒明朝初期ごろ、第二期は天智朝ごろに編年される。このことから、秦寺は推古三

十年の発願後、本格的伽藍の寺院として造営されたが、その造営は必ずしも順調には進まず、伽藍完成にはかなりの年月を要したことがわかる。

第五章 蜂岡寺と秦寺との合併について検討する。

『広隆寺縁起』には、九条荒見社里や九条河原里にあった寺家地が頗る狭隘であったので、五条荒蒔里すなわち現在地に移転したと書かれている。しかし、第三章・第四章で検討したように、旧寺家地と推定される北野廃寺址には推古十一年に蜂岡寺が、また現広隆寺境内地には推古三十年に秦寺がそれぞれ創立されていたから、『広隆寺縁起』のいう移転は、実は蜂岡寺が秦寺に移転して合併したことであると考えざるを得ない。

従来、移転の理由とその時期については、平安遷都によって寺家地を収用されて狭くなったためという田中重久の説が妥当であると考えられる。北野廃寺址周辺の地図からみて、

蜂岡寺は九条河原里の十町の寺領地すべてを収用されたと推定される。ところが、延暦十二年（七九三）七月勅によって平安京に土地を収用された寺院には代替地を支給しないことになり、寺領地すべてを収用された蜂岡寺は経済的に危機に陥つたのであるが、秦寺はごく一部分しか収用されておらず、大きな打撃は受けなかったと考えられる。そこで蜂岡寺と秦寺の檀越の秦氏は、蜂岡寺の寺籍を秦寺に移して合併させ、健全な寺院運営を図ったのであろう。

この合併によって従来別個の寺院であった蜂岡寺と秦寺は同一寺院であったかのように認識されるようになった。とくに承和三年成立の『広隆寺縁起』に引用された「案内」では、合併によって成立した広隆寺という単一寺院の創立縁起を記すために、以前まで別個の寺院であった蜂岡寺と秦寺の創立伝承を結びつけ、また『補闕記』では聖徳太子建立寺

院とされていた蜂岡寺の創立縁起を記すに当たり、蜂岡寺の創立縁起に秦寺のそれを結びつけた。その結果、蜂岡寺と秦寺とはもとより同一寺院であるとの認識が一般化したのである。

第六章 宝冠弥勒と泣き弥勒の制作地や制作年代を検討しながら、蜂岡寺と秦寺の本尊問題を考察する。

まず宝冠弥勒は、韓国の国宝八十三号菩薩半跏思惟像をはじめとする日韓の半跏像と比較検討すると、慶州市城乾洞出土半跏像など新羅の半跏像の流れを汲むもので、百濟系半跏像とは系統を異にしている。また宝冠弥勒の制作年代は、右足の不自然な曲げ方などから七世紀初期と考えられる。一方の泣き弥勒は右足先の曲げ形や定型化した耳の環孔表現からみて天武朝ごろの日本の作であると推定された。

つぎに蜂岡寺と秦寺の本尊を考える。蜂岡寺の当初の本尊は聖徳太子から受けた仏像であつたが、これは本格的な寺院の本尊となりうる等身大以上の仏像であつたとは思えず、おそらく小金銅仏のようなものであろう。蜂岡寺は法隆寺が被災した天智朝末ごろに住宅式仏堂を本格的な伽藍に整備していたが、その際に本格的な伽藍に相応しい新しい本尊を制作したと推定できる。秦寺は発願後おさめられた新羅獻上仏が本尊とあつたと考えられる。したがって宝冠弥勒は『日本書紀』推古三十一年条にみえる秦寺に安置された新羅仏で、一方の泣き弥勒は七世紀後半に住宅式仏堂から本格的な伽藍を造営した蜂岡寺の新本尊として制作されたと結論した。

このように宝冠弥勒と泣き弥勒は、当初は秦寺と蜂岡寺の本尊であつたが、平安遷都ごろ蜂岡寺が秦寺に移転合併することによって、蜂岡寺の本尊の泣き弥勒が秦寺に移された

結果、一寺に二軀の半跏思惟像が併存することになったのである。

第七章 平安初期における広隆寺の本尊交替問題を検討する。

広隆寺は平安遷都直前の延暦十二年に寺地を収用された蜂岡寺が秦寺に移転合併したもので、秦寺の宝冠弥勒が本尊であったと考えられるが、何時しか薬師像が広隆寺の本尊になっている。この薬師像は延暦十六年に他所から移入されたことが毛利久によって明らかにされている。本尊の交替は寺院のアイデンティティを替えることで、よほど特別な事情がないかぎりあり得ない。では、何時、なぜ本尊を交替したのだろうか。

毛利久や川尻秋生は蜂岡寺と秦寺を同一寺院とする立場から、移転するには伽藍造営の必要があり、その際に本尊を交替したと考えているようだが、広隆寺の移転とは実は蜂岡寺が寺籍を秦寺に移して合併したことであり、そこには秦寺の伽藍と本尊があったのだけ

ら、新に伽藍を造営する必要も、本尊を交替する必要もない。

しかも合併直後の広隆寺は、旧峰岡寺派と旧秦寺派の間に紛争が生じて別当泰鳳は公文書を窃取逃亡する事件があり、その影響によって弘仁九年（八一八）の伽藍焼失の際にもすぐ再建できない状況にあった。したがって、移転時はむろんのこと、弘仁九年の伽藍焼失後しばらくの間は、本尊の交替ということがあり得たとはとうてい思えず、伽藍再建に際しておこなわれた可能性が高い。広隆寺の伽藍再建は、別当道昌によって進められ、文徳天皇の七々日齋会がおこなわれた天安二年（八五八）七月には中心伽藍の再建が終了したと考えられるから、薬師像はそのころに広隆寺の本尊になったと推定される。

道昌が再建事業を進めた当時は、薬師信仰は最高潮に達し、山岳修行僧が活躍した時代であった。また『広隆寺縁起資財帳』をみると、再建後の広隆寺の伽藍は金堂や講堂など

中心伽藍はすべて檜皮葺き建物で、従来の瓦葺き建物は一棟もみえない。この寺観の改変は本尊の交替と同じく寺院のアイデンティティの変化といえる。このように檜皮葺き伽藍に薬師像を本尊とする寺院は平安初期に建てられた山岳寺院に多くみられる。つまり道昌は薬師像を本尊に据え、中心伽藍を檜皮葺き建物にすることによって、薬師信仰を核とする広隆寺の靈驗道場化を図ったのであった。その後、新本尊の靈驗薬師像は朝野から篤い信仰を寄せられ、広隆寺は大いに繁栄するのである。